

西野亮廣、
伝統産業の街・高岡で
12代目鋳物師を演じる

DENSAN



映画『デンサン』、 ニューヨーク&パリで上映決まる。

高岡の伝統工芸・鋳物をテーマにした映画『デンサン』が、ニューヨークとパリで相次いで上映されることが決まった。同作品は、高岡市の金森正晃監督(37)がメガホンを取ったもので、2017年11月に第34回伝統的工芸品月間国民会議全国大会 東京大会、12月には公益財団法人日本台湾交流協会などでも上映され好評を博した。ニューヨークでは2018年11月に開催される映画祭「ニッポン・アメリカ・ディスカバリー・フィルム・フェスティバル」で、パリでは日仏友好記念イベント「ジャポニスム2018」で来年2月に公式上映される予定。

「伝統とは何か」を問う

映画『デンサン』は、12代続く鋳物工場働く主人公が、伝統工芸の世界の中で新しいモノを生み出そうと仲間と共に奮闘する物語。自身も鋳物師の血脈を受け継ぐという金森監督を中心に、地元の市民や有志、企業などの協力を得て完成させた。富山の名所や高岡の街並み、歴史をさりげなく取り入れながら、「伝統とは何か」を問いかける作品だ。映画完成以来、試写会を中心に国内外で上映されてきた。本年5月には台湾・台南市にある教育機関でも試写会と講演会が開催され、伝統工芸に携わる人々とどまらず広く市民の参加を得た。

“DENSAN”を欧米に発信

11月16日、17日に行われるニューヨーク「ニッポン・アメリカ・ディスカバリー・フィルム・フェスティバル」は、「知られざる日本」の紹介を目的とする映画祭で、今年が第1回目の開催となる。日本で制作された5作品が2日間にわたって上映される予定となっており、『デンサン』は最終日の最後を飾る。当日は金森監督の舞台あいさつと質疑応答も行われる。

一方、パリの「ジャポニスム2018」は、日仏友好160周年を期し日仏政府共同で開催されている大規模なイベント。2018年7月から2019年

2月までの会期を通じ、パリ内外の100近くの会場を舞台に、美術展、舞台公演、映画をはじめ、さまざまな日本の芸術と文化が幅広く紹介されるというもの。『デンサン』は、2月中旬開催予定の「伝統工芸シリーズ」の中で公開されることになった。上映当日は金森監督に加え、出演女優・山本真由美さんも出席することになっている。

金森監督は、2019年3月には再び台湾を訪問し、次の作品づくりへのステップを踏み出す。新たなテーマとして構想しているのは“デンサン・クロスロード”日本、台湾、国境を越えた伝統産業の〈交流〉を描いていく考えだ。「海を越えた『デンサン』が『DENSAN』と表記され、クールジャパンを後押しできるようなストーリーをそこに付け足したい。世界を席卷する日本のものづくり、高岡の『DENSAN』を胸を張ってPRしたい。」と意気込んだ。

「伝統」を超えて

「伝統は死んだ」—『デンサン』に添えられたキャッチコピーだ。いささかクセの強いこのフレーズには、金森監督のモノづくりや伝統文化に対する強い想いが込められている。

「高岡は400年の歴史を通じて、戦の時代には武器を、開拓の時代には火鉢を、仏教が盛んになれば仏壇仏具を作り、それが伝統産業と呼ばれるようになった。それはチャレンジの歴史であって、固定化された『伝統』なるものをあがめ奉り墨守してきた歴史ではない。だから敢えて『伝統は死んだ』と言い切ることから始めたい」と語る。

映画というエンターテインメントには、モノづくりやデザインに興味を持つ人々の枠を超え、より多くの人々に広く魅力を伝えられる力がある。「富山県のお家芸、ものづくりのベースにある伝統産業を映画という手段を使って発信。日本のものづくりに関わるはずのなかった世界の人々と出会い、交流する、消えかかっている伝統技術に新たな触媒をもたらすチャンスはあるはず。映画がトリガーとなって、モノづくりの新しいねりを創り出せれば」と、金森監督は語っている。